オアシス

文責：副学長
桑 原 雅 次

出雲芸術アカデミーだより　２０２１年１０月１１日発行　第４２号

ノーベル物理学賞に“真鍋淑郎”氏が受賞という快挙の報が飛び込んできました。真鍋氏は、早くから地球温暖化を予測されていましたが、現実味を帯びた時点でようやく受賞となりました。また、物理学賞という気候の分野では特例ということだったようです。気候変動は人為的影響が大きいことを人類が初めて認めた結果ということでしょうか…。

１０月に入っても気温は真夏日が多く、秋を感じられる季節感はどこへ行ったのか、地球の危機が身近な生活にも忍び足で迫ってきているように感じられるこの頃です…。

◎ 出雲 Jr.フィル定期演奏会を開催！

１０月３日、爽やかな秋空のもと平田文化館プラタナスホールに多くの皆様（283 名）をお迎えし、第９回プロムナードコンサートとして開催することが出来ました。今回のテーマは『仮面の告白～秋の大運動会』と題し、コロナ禍での開催でマスク着用が欠かせない現状を鑑み、選曲にあたって「仮面」が想定されたものを中心にプログラム構成されました。仮面といえば、西洋文化においては、舞踏会などで仮面を装着して参加する風習などがあり、オペラでも度々仮面をつけて上演される場面が多くあります。

一部ですがプログラム順に様子を紹介していきたいと思います。

◆オープニングは、アカデミー生４人とインターンシップ生４人によるトロンボーン・アンサンブルから始まりました。曲は「アメイジング・グレイス」。オープニングという最も緊張する場面ですが、８人が緻密なアンサンブルを披露しました。

◆ジュニアコーラスは、最初に「女声合唱とピアノのためのモーツァルトの百面相」という難曲を、時にはユーモラスに歌いあげました。この曲の特徴は、モーツァルトの様々な曲を集め、そのメロディーに歌詞がつけられたものです。中にはオペラ歌手でもハイトーンに苦労する場面を軽快に発声している姿に感動しました。２曲目は「混声合唱曲集《地平線のかなたへ》からサッカーによせて」を、本アカデミーのボーイズクワイアのメンバーの協力を得、混声合唱を披露しました。女声合唱に男声が加わった混声合唱のそれぞれの魅力が良く伝わり、普段の練習成果が発揮できた好演でした。

◆ジュニアオーケストラは、「ヴェルディの歌劇《仮面舞踏会》の主題によるカドリーユ」から始まり、オペラのダンスの場面をＪ・シュトラウス２世が作曲したものです。２組あるいは大勢の男女が輪になって踊る様子がリズミカルに表現され、まるで舞踏場の情景が思い浮かぶようでした。次にカバレフスキーの「組曲《道化師》」を、いわゆるピエロのような笑わせる人の様々な内面に迫る

裏面へ

場面を表情豊かに演奏していました。おどけた場面だけでなく、どこか哀愁に満ちた物悲しい雰囲気はゾクゾクと鳥肌が立ちました…。

◆オーケストラで歌おう！のコーナーは、昨年「校歌プロジェクト」で出雲市内の小中学校校歌を出雲フィルハーモニー・チェンバーオーケストラで録音する事業を行いました。そのような経緯があることから、平田地区に馴染みの深い中学校２校の校歌を演奏するというものです。ジュニアコーラスとジュニアオーケストラの皆さんによる生演奏の校歌を堪能していただきました。来場者の中には口ずさみながら聴かれている方も多かったようです…。

◆エンディングは、オリンピック東京大会２０２０の開会式でも話題になったゲーム音楽「英雄の証～モンスターハンターより～」を、オリンピックの感動を再現するかのようにホールいっぱいに響かせコンサートを締めくくりました。

つぶやき

秋は過ごしやすさからか、〇〇の秋と例えられることが多い季節である。その中によく言われるのが「芸術の秋」です。昨年からコロナ禍の関係で、すべてのものが不要不急扱いされ、世の中の活動が制限される状態が続きました。しかし、２年目ともなるとさすがにすべてのものが制限される事には抵抗が出てくるようで、人の行動にも賢さが備わっているように見えます。そんな中で「芸術」の存在が人の精神状態の安定剤としての役割が大きいことに気付かされることがあります。確かに、明日生きていくために必要であるかといえばそうでないかもしれません…。しかし、人は精神的な拠り所が無ければ案外弱くもろい生き物です。そこで、美術館や音楽ホールへ出かけて崇高なものに触れることが、心の支えとなり生きる勇気が出てくるのではないかと思うのです。

話は変わって、我が国の政治政策を観ていると、経済優先の政策が目立つようです。経済が大切であることは理解できますが、一辺倒では生活のバランスが崩れるように思われます。ある程度経済力が付けば、本物の豊かな国づくりとはどういうものかを考えるべきかと思います。多くの先進国は、文化を大切にする精神が根強く、それなりの予算もつきます。人々が要求するからと思いますが、そうしないと精神的に落ち着かないからだと思われます。豊かな暮らしには、公共施設としての器も必要です。その為の美術館や音楽ホールは必要不可欠といえるでしょう…。逆に器だけあってもアンバランスとなり、それを活用できる組織が必要となります。その点、この出雲市には出雲フィルハーモニーオーケストラ及び出雲芸術アカデミー音楽院が存在しています。全国でも珍しい取り組みで芸術振興のために活動を行っています。その活動が、市民の皆様への浸透度がいかがなものかといえばまだまだ疑問が残ります。このような状況を脱する為には、とにかく打開に向けた戦略と行動が必要と捉え、芸術の普遍的価値の追求を続けなくてはと強く思う次第です。

今年もノーベル賞の受賞者が発表されました。一方で、将来日本人がノーベル賞を受賞する機会が失われる事が危惧されています。それは、国の研究費助成の削減が一因とされます。経済と文化（教育・研究・芸術等）が両輪となる世の中を目指してもらいたいものです…。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します https://www.izumo-zaidan.jp/academy/】